

水害に備える

—荒川氾濫から命を守る—

氏 名：福原伸宏

## 目次

序論.....	1
第一章 高野園の現状と課題点.....	2
第一節 現状.....	2
第二節 現状からみた課題.....	2
第二章 正しい水害知識に向けた取り組み.....	3
第一節 方法.....	3
第二節 取り組み.....	5
第三節 取り組んだ結果と考察.....	7
今後の課題.....	9
引用・参考文献.....	9

## 序論

乳幼児期は、人格形成がされる成長・発達の段階にあり、養護を必要としている。このような子どもたちをケアする保育所、幼稚園の災害への備えは大切である。宍戸・久保・坂口・田崎・草間・倉持(2013)は、幼稚園教育要領(文科省)、保育所保育指針(厚労省)について触れ、災害などに備えた避難訓練の重要性について取り上げている。幼稚園教育要領の中には、「災害などの緊急時に適切な行動がとれるようにするための訓練なども行うようにすること」や、保育所保育指針でも「火災や地震などの災害の発生に備え、緊急時の対応の具体的内容及び手順、職員の役割分担、避難訓練計画等に関するマニュアルを作成する」と記されている。

現在の日本において、地震災害はもちろんのこと、台風やゲリラ豪雨による土砂災害や竜巻など様々な災害が発生している。2019年10月6日に日本列島を襲った台風19号は、記録的豪雨で多数の水害をもたらした。

当時、足立区を流れる荒川も氾濫危険水位まで上昇し、区内135箇所の避難所が開設された。ピーク時には33154人が避難した。台風一過の早朝、定点カメラの映像によると、荒川河川敷は完全に水没し橋脚もすっかり水に隠れるほど水位が上昇していて、紙一重の状態だった。

災害は、ある程度予測をすることが可能にはなってきているが、正確な場所、時間を限局することは難しく、日頃の備えは必要不可欠である。東日本大震災時のある保育所では、「避難マニュアルには津波警報が出ている時は、保護者が迎えにきても帰さないことが明記してあったため、保育士が説得して保育所に留まり一緒に近隣の公民館へ避難をした。この判断が保育所として子どもと保護者の命を救うことになった」と報告している(全国保育協議会、2013)。このように災害には、マニュアルの作成や避難訓練などの防災対策が必要であるとともに、その場にいる職員自身が高い災害意識をもつことで、真の防災へとつながり、養護が必要である子どもたちの多くの命を安全に導くことができる。

そのため本レポートでは、水害から命を守るために園としての体制作りに取り組む。

## 第一章 高野園の現状と課題点

本章では、2019年4月から2019年12月までの高野園の現状をまとめ、そこから見えてくる課題について考察する。

### 第一節 現状

高野園は、荒川から直線距離で822メートルの位置にある。荒川が氾濫した場合における足立区ハザードマップによると、「早期立ち退きエリア」に指定されている。予想浸水水位は3メートル以上5メートル未満とされ、屋内でも溺れてしまう可能性が高い。つまり浸水が始まる前に避難しなくてはならない。

水害における避難所は、扇小学校まで450メートル（大人の足で徒歩7分）、江北桜中学校は800メートル（大人の足で徒歩12分）の距離にあり、園児を連れた避難はすぐに完了することができない。また、予想浸水水位に達した場合の浸水継続期間は1日以上3日未満と予想されていて、避難の重要度が高い地域にある。

### 第二節 現状からみた課題

こういった地域にある保育園として、災害時に職員全員が子どもたちを正しく安全に避難させ、命を守る行動がとれるだろうか。2019年4月の開園から毎月1回以上の避難訓練を重ねてきたが、どの訓練も想定された時間に想定された災害が起こり、決められた場所に避難するという形式的な内容であった。もちろん開園間もない状況のため、園児に大きな不安を与えないような内容にするという配慮のもとではあったが、2019年台風19号の猛威を振り返ると災害に備えた仕組み作りを早急に取り組まなければならない。実際、台風19号で近隣の千住地区においては、人口77960人のうち4997人が避難所へ避難した。地域防災計画では開設予定の避難所は4校のみであったが、実際は、改装中で使用できなかった学校を含む9校すべてが開設され、さらに高校や大学等も避難者を受け入れた（久保・高橋、2019）。

そこで、本園の職員に対し、災害時の対応力等を確認するために、2019年12月26日に抜き打ち避難訓練を実施した。朝9時の合同保育中における園長、主任不在という状況で、地震を想定して行った。その結果、防災頭巾や避難リュックの場所が分からない、正確な人数確認ができない、指揮をとる職員が明確でないといった致命的な反省点が浮かび上がった。これではいつ起きるか分からない

い自然災害に対して、正しく安全に避難行動をとることは難しいと判断できる状況であることが明らかとなった。

また、水害について職員にヒアリング調査も実施した。荒川氾濫時における予想浸水水位を訪ねると、ハザードマップに記載されている正確な水位を把握している職員は 0 人であった。避難場所についても正しく答えることができたのは全職員 18 名のうち 9 名の 50% で、職員の回答のうち、園舎 2 階や近隣の団地など高いところに避難するという認識は見受けられた一方で、分からないという回答も 19% だった。氾濫情報の入手方法も人それぞれに違いが見られ、自治体からのメール (A メール) や防災無線といった回答が 50% あった一方で、スマートフォンのアラートやテレビ・ラジオという回答も 37% であった。そして、荒川の源流となる場所を知る職員は 0 人という結果だった。川の水位は今いる地域に大雨が降っていないなくても、上流部の大雨によって時間差で急上昇するが、荒川のその源流となる地域がどこなのかを誰も答えることができなかった。

こうした現状から水害対策を早急に進め、水害から命を守るための体制を構築する。

## 第二章 正しい水害知識に向けた取り組み

本章では、既述した現状と課題に対し、水害に対する正しい知識の習得や職員間の共通認識を目的とし、以下の方法で取り組みを行う。

### 第一節 方法

保育所保育指針では、「第 3 章 健康及び安全 4 災害への備え (2) 災害発生時の対応体制及び避難への備え ア 火災や地震などの災害発生に備え、緊急時の対応の具体的内容及び手順、職員の役割分担、避難訓練計画等に関するマニュアルを作成すること」と記されている。

また、先行研究を調べると、保育所における水害対策は大きく 4 つの取り組みに分かれている。

1 つ目は水害の予測である。地震や火災等に比べ、保育現場は水害対策における避難訓練実施の事例は限られているが、水害は全国どこにでも起こりうる災害である。地震発生時の避難と水害発生時の避難は同じ《避難》という言葉が使われているが、大きく異なる意味を持つ。地震は災害発生後に避難を行う突発型の災害であることに対し、水害は降雨から危険な状況になるまで猶予時間 (リードタイム) がある進行性の災害であり、事前に避難することが重要である。避難を開始する時間が早ければ早いほど、避難における選択肢が多くなり、より安全な方法をとることが可能となる (田村、2019)。

2つ目は日常より防災に取り組む必要性である。千葉（2019）は、東日本大震災で実際に被災した保育園や幼稚園においてどのような避難が行われたかを検証し、①「的確な人数把握」②「職員の役割分担」③「子ども一人ひとりに応じた避難」が命を守る要因となったことを示した。また、「日常の保育の大切さ」についても述べ、いつ、どの時間帯においても命を守れる仕組み作りと保育の質が必要であることも述べている。その日誰が来ていて、誰が休んでいるのか、クラスの職員同士、さらには他クラスの出席状況なども職員間で周知し的確な人数把握をすることが重要な点である。役割分担においては、看護師や調理員など、保育に直接関わらない職員も災害時にどのクラスの避難に入るのか、どのような役割を担うのかなどを明確にしておく必要がある。さらには、一人ひとりの子どもがどのような特徴を持ち合わせているかを把握しながら活動を行うことも必要である。衣服や靴の着脱、歩行力、職員や友達との関係性などを把握し、災害時には一人ひとりに応じた避難をする必要がある。自然災害は日時を選んでくれない。日常から防災に取り組むことが重要である。

3つ目は地域交流である。災害時は園単独で避難をするより地域と協力し、大人の手を借りて避難することが望ましいが、岡本・白神（2020）は「地域との関わり」について保育者は重要視していない傾向にあることを述べている。また、地域の関係機関との連携は日常の交流の積み重ねによって築かれるものであり、保育者が日頃から「地域との関わり」を意識できるようにしていくことが大切であること、そして、地域との結びつきを強化していくことがひとつの防災にもつながることを示唆している。地域住民の中で開かれた保育園であるということはいざというときに「自然と心配し合う」その位の密な関係性を構築しておくことが命を救う要因にもなりうる（千葉、2019）。

4つ目は活用できるマニュアルの作成である。マニュアル作成においては2つの重要点があり、1つ目は全ての職員が参画することである。マニュアルは、「全員がサイトやマニュアル作成の手引きを閲覧し、必要と思う内容を提案し合い、それらを組み込んだ原案を話し合っって作成し、その原案をチェックし合い、数回の修正をかけて、最後に集まって決定する」（清水・千葉、2016）ものであり、マニュアル作成において全職員で PDCA サイクルを実践することが大切である。しかし、マニュアルは完璧で膨大なものを求めても、事務仕事で終わってしまっは意味がない。マニュアルを活用できるようにならなければ、災害から子どもを守れない。2つ目は、「マニュアルと実践の間に、アクションカードなどの仲介するものを挟むこと」（湯浅・中野・山城・蔭岡・多田・村上・鳥庭、2013）である。災害時など、急を要するときにはマニュアルを開いてはいられない。そこで、仲介カードを活用し災害時の重要なポイントだけをまとめる。そして、地域特性や子どもたちの特徴なども踏まえ、訓練を通じて自園にふさわしい内容

に改善し、継続的に完成度を高めていくというプロセスが重要である。

## 第二節 取り組み

ここでは、先行研究から明らかになった 4 つの観点から水害への備えについて全職員が参画して取り組む。

### ①被害の予測を知る

2019 年 3 月から、別紙資料①を活用し、高野園の地域がどのようなリスクのある場所なのかを全職員で把握した。足立区のホームページにある動画を閲覧したりハザードマップを共有したりして、想定される被害を把握していった。同時に、あだち安心電話（河川の氾濫による水害のおそれがある場合に、水位や避難に関する情報を自動音声で知らせてくれるもの）と A メール（自治体が気象庁からの災害情報を即時自動転送してくれるもの）を登録し、その内容を全職員に周知した。この他、防災行政無線や広報車、足立区ホームページでも災害情報が入手できることも全職員に周知した。また、荒川の源流となる秩父地域の 24 時間降水量が 400 ミリを超えると水害危険となる基準も全職員に周知した。これら災害の情報収集の方法や予想浸水水位、避難場所と避難ルートの把握については、書き取りテスト（添付資料②）を実施して、全員が全問正解で合格するまで取り組んだ。

### ②日常防災

まずは正確な人数確認をする方法を検討した。保育の中で、保育士が毎日活用している伝達ボード（添付資料③）には、登園時の園児の検温記録が必ずされているため、登園していると判断することができる。降園済や欠席の連絡のあった園児は、園児名を斜線で消して不在と判断できることから、日常の保育の中で伝達ボードから読みとる園児数と実際にいる園児数が一致するかを確認することにした。このルールで 2019 年 3 月から開始し、決まった時間に園児数を確認する取り組みを日常の保育に取り入れた。

次に、職員の役割分担を明確にした。災害時は園長、主任が指揮をとり、保育士は子どもの避難誘導にあたるのが基本体制だが、看護師や調理員の役割も位置づけた。調理員は火災有無の確認に加え、一番援助が必要となる 0 歳児、1 歳児クラスの避難補助、看護師は救護（フリー）とした。園長、主任が不在となるときの指揮は、足立区に長く居住していて地域の特性を把握し、さらに地域で最も保育歴が長い職員（①40 代保育士 1 名、②40 代調理師 1 名）を任命した。これらのルールのもとで、2020 年 4 月からは園長不在を想定した避難訓練を繰り返し行い、状況に応じた動きが職員間でとれるよう取り組みを進めてきた。また、避難車（散歩車）の使用方法も全職員で把握した。添付資料④を活用し、保育士だけではなく看護師、調理員も実際に動かし、正しい使い方や注意点について伝

え、誰もが園児を乗せて運べるよう練習に取り組んだ。防災頭巾や非常用バックの格納場所は、写真やイラストを貼り、見える化することで職員に限らず子どもたちにも一目で分かるようにした。また、各クラスの園児の様子や特徴については、日々の昼礼や職員会議の中で共有し、特に援助が必要な園児については、災害時にどのような状態になることが想定されるかを全職員で話し合いを進めた。また、0歳児6名と1歳児10名は、職員全員でおんぶをすることで避難時間の短縮をはかることができる。2020年5月に16名分のおんぶひもを購入し、毎月の避難訓練では看護師や調理員も含め職員同士で協力しておんぶする練習を繰り返した。

### ③地域交流

自治体の災害対策課による出張出前講座を依頼し、園内研修を実施した。水害における足立区の特性を改めて学び、直近の2019年台風19号における足立区の避難状況や浮かび上がった課題点を確認しながら、自園の状況に照らし合わせて考えるきっかけとなった。足立区主催の災害対策研修では、コロナ対策も考えた避難方法を検討する必要性を述べていた。そこで、早速避難所となる小学校へ訪問し、校長先生と水害避難について情報共有を行いながら、避難方法について確認した。園児数と職員数を共有し、「校舎3階に避難が可能」であり、受け入れ許可を得た。2020年10月には、校長先生の許可を得て、園児38名と職員14名で水害を想定して、避難所までの避難訓練を実施した。

### ④マニュアル（アクションカード）作成

マニュアル作りと同時に、マニュアルよりも取るべき行動が一目で分かりやすく活用しやすいアクションカードの作成に優先して取り組んだ。作成にあたり、全職員が参加する会議の時間を設け、水害の危険がある際に自分たちがとるべき行動について意見を集めた。そして、水害警戒レベルに応じて必ずしなければならないことを箇条書きにしてまとめることで、緊急時にはそれをもとに行動するというアクションカードが完成した。アクションカードをもとに避難訓練を重ね、評価と改善をしながら見直し、協議・修正してまた訓練を実施するというサイクルでより実践的で実用的なものへと変えていく（図1）。



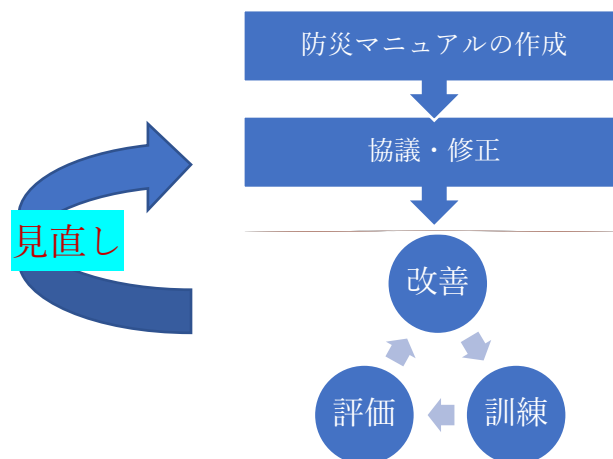


図1 学校の危機管理マニュアル作成の手引き 文部科学省（2018）を一部改変

### 第三節 取り組んだ結果と考察

2019年12月の抜き打ち避難訓練では、職員がパニック状態となり、園児の人数確認もできない状況だったことをきっかけに、先行研究から学んだ4つの視点で水害対策に取り組んできた。その結果について考察する。

①2019年1月に全職員で視聴した足立区ハザードマップ解説動画では、荒川が氾濫した際の北千住駅前のシュミレーション映像が流れ、職員は衝撃を受けていた。これを機に職員は、被害の予測を知ることによって危機管理意識が芽生えていった。高野園の地域特性を踏まえて抱えているリスクを理解し、水害から命を守るための正しい情報収集手段や避難ルートを全職員が把握したことは、大きな一歩である。

②日常防災について、2019年12月以前は人数把握や役割分担などの仕組みは何一つ整っていなかったが、添付資料①を活用して全職員で共通認識を図ることから始めた。以降、毎日の保育で人数確認を繰り返し積み重ねてきたことで、伝達ボードと照らし合わせて人数確認をする習慣が付き、避難訓練では誰がどのクラスにいても正確な人数確認ができるようになった。また、人数確認の大切さを職員が理解し、散歩の際も、保育基本マニュアルに沿った方法を全職員で改めて共有し実践するようになった。毎月の避難訓練では、園長が不在の想定で行っているため、各々が責任を持って行動するようになった。2020年8月の避難訓練では、保育士が夏休みを取得して、本来、救護（フリー）の役割を担う看護師が保育補助に入っていたため、全体指揮を担当した保育士が臨機応変に職員間での連携を図り、ケガの確認や救護（フリー）の役割も同時に担う姿が見られた。おんぶひもは調理員も体験し、初めは背負い方に戸惑い、園児の重さにも驚いていたが、訓練を重ねることで新卒保育士と二人で協力し、当たり前のよ

うにおんぶする姿が見られた。

③地域交流について、今回の取り組みを行うまでは災害に対する交流はできていなかった。それから2020年1月以降、園内研修や外部研修を通して知識を深め、2020年10月26日には水害を想定して避難所までの避難訓練を行った。当日は0歳児5名と1歳児8名を職員がおんぶし、2歳児10名は散歩車に乗せ、3歳児以上15名は歩いて避難した。避難所までは450メートル、大人の足で7分の距離だが、全園児を連れての移動時間は11分で避難完了した。移動を開始するまでの避難準備も、0,1歳児13名のおんぶは5分で完了、人数確認も全クラスが正確に行うことができた。調理員は非常用リュックを背負いながら避難補助の役割を果たし、看護師も1歳児をおんぶした状態でケガの有無を確認するなど、全職員が主体的に行動していて、これまで積み重ねてきた訓練の成果がみられた。次回、12月には江北桜中学校(800メートル)までの避難訓練を計画している。園長不在の状況でも、職員同士で連携を図って正しく避難完了ができるよう今後も訓練を積み重ねていく。

④マニュアル(アクションカード)について、地域の特性に合わせた具体的な避難手順が示されたものはこれまで存在しなかった。そこで、東京マイタイムラインを活用し、全職員で意見を出し合ってアクションカード(添付資料⑤)を作成した。意見を出し合う職員の姿は、主体的・協働的であり、「水害から命を守るため」という目的に向かって建設的な話し合いが進み、防災意識の高まりがみられた。このアクションカードによって、取るべき行動が一目で分かり行動しやすくなった。一方で、「本当の災害時にこれだけの行動がとれるのだろうか」という声も職員から上がっている。「もっと端的に、シンプルなことだけを載せておかないと、それこそ時間がかかってしまう」という意見や、「全クラス同じ内容にするのではなく、クラスごとに内容を協議して必要事項を記載する」という案もでたため引き続き検討している。このことから、職員一人ひとりが主体的に取り組み、子どもの命を守ろうとしている意識がうかがえる。

以上4点について取り組んできた内容は、水害対策における4つの柱として(図2)のように表すことができる。

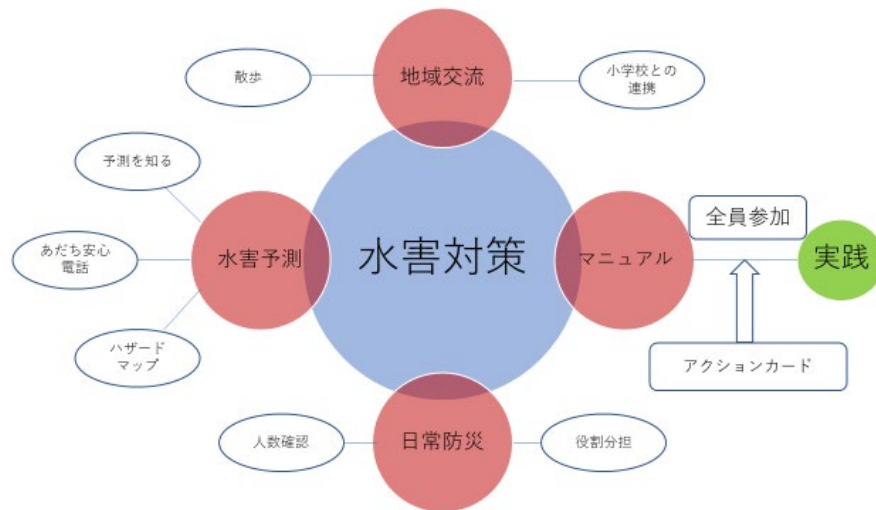


図2 水害対策 4つの柱

### 今後の課題

これらの取り組みにおいて、全職員が参画して進めてきたが、今後も地域の状況や園児・職員の体制に応じて継続的に行うことが大切である。(図2)のように、4つの柱が水害から命を守る要因となるが、さらには、保護者の協力という点も重要である。職員や地域との連携に加え、保護者にも災害避難について理解を求める働きかけが必要である。しかし、災害対策について保護者への理解が進んでいない現状がある。2020年9月1日、災害を想定して災害伝言ダイヤル171にメッセージを残し、保護者に体験利用してもらう取り組みを実施したが、42名中1名しか利用していないという結果だった。今後は災害時に向けて保護者への連絡手段や引渡方法についても検討し、5つ目の柱として保護者と連携した災害対策を確立していく。

### 引用・参考文献

岡本和花・白神軽敬介(2020)。「就学前施設における保育者の防災教育意識の実態」 上越教育大学研究紀要、第2号第39巻、292-299.

小倉華子・市古太郎(2019)。「保育所・幼稚園等における災害対応力に関する研究-東京都町田市を対象として」 地域安全学会論文集、第35号、107-114.

久保純子・高橋虎之介(2020)。「足立区千住地区における避難所の課題と2019年台風19号」 日本地理学会発表要旨集、セッションID:711

宍戸路佳・久保恭子・坂口由紀子・田崎知恵子・草間真由美・倉持清美（2015）.  
「A 県の保育専門職者の防災、災害に関する意識」 東京学芸大学紀要総合教育  
科学科、第 66 号第 2 巻、349-356.

清水益治・千葉武夫（2016）.「幼稚園・保育所・認定こども園における災害マニ  
ュアルの実態」 帝塚山大学現代生活学部紀要、第 12 号、75-84.

田村美由紀（2019）.「保育現場に求められる河川教育と防災教育の検討」 淑徳  
大学短期大学部研究紀要、第 60 号、33-46.

千葉直紀（2019）.「保育におけるいのちをつなぐ防災とは ～東日本大震災から  
見えてきた日常の防災と記憶の継承～」 上田女子短期大学紀要、第 42 号、49-  
63.

中野晋・鳥庭康代・武藤裕則・宇野宏司・金子純子（2014）.「豪雨災害を対象と  
した保育所の業務継続のあり方」 土木学会論文集 F6(安全問題)、第 70 号第 2  
巻、45-52.

湯浅恭史・中野晋・山城新吾・蔭岡弘知・多田雄一・村上佳代子・鳥庭康代（2015）.  
「災害時アクションカードを用いた訓練手法による幼稚園での津波避難行動の  
高度化」 土木学会論文集 F6（安全問題）、第 71 号第 2 巻、187-190.

## 別紙資料①

### 荒川氾濫における共通認識

2020年3月12日

#### ●被害の予測を知る

- ① 正確な情報入手は、あだち安心電話（登録済） Aメール（登録済） 足立区 HP  
防災行政無線 広報車など
- ② 荒川の源流は埼玉県西部の山間部「秩父地域」。秩父地域の24時間降水量が400ミリを超えると危険予測の判断基準となる（足立区危機管理部 災害対策課）
- ③ 荒川が氾濫すると高野園は3メートル以上5メートル未満の水位で浸水すると予想されている（ハザードマップ参照）
- ④ ③の水位で浸水すると、浸水継続期間は1日以上3日未満と予想されている（ハザードマップ参照）

#### ●正しい避難方法を知る

- ⑤ 荒川が氾濫した場合の避難所は、  
扇小学校（450メートル 徒歩7分）  
2番目の避難所は江北桜中学校（800メートル 徒歩12分）  
実際に氾濫が始まってからの避難となったら江北桜中学校に向かうでしょう  
※それではだいぶ手遅れですが。。
- ⑥ 園児数の確認方法は、伝達ボードを活用する。  
登園＝伝達ボードに検温が記録されている園児が登園という共通認識  
降園＝伝達ボードの名前が斜線で消されている園児が降園（欠席）という共通認識  
※ワークスケジュールリングよりも素早く確認できるためアナログ方式を活用
- ⑦ 役割分担は、リーダー（基本施設長）サブリーダー連絡係（基本主任）  
調理師は0歳児・1歳児の援助と避難誘導 看護師は救護（フリー）
- ⑧ 園長・主任が不在時の指揮は、足立区在住歴と保育歴が長い順に選定  
①かつこ t ②みき t ③ますみ t

#### ●その他

各クラスに防災頭巾マーク作成（安全係） 1F・2F倉庫に非常食あり（えみ t）

## 荒川氾濫時における避難対応

日付： \_\_\_\_\_

名前： \_\_\_\_\_

### 1. 被害の予測を知る

- ① 正確な情報はどのように入手しますか？（自由記載）

- ② 以下の空欄を穴埋めせよ。

荒川の源流となる（            ）地域の  
（            ）時間以内の降水量が（            ）ミリを超えると  
荒川が氾濫する危険があると判断する。

- ③ 荒川が氾濫した場合、高野園はどれくらい浸水すると予測されますか。（穴埋め）  
（            ）メートル以上（            ）メートル未満
- ④ 上記の水位で浸水した場合、その浸水はどれくらいの期間続きますか。（穴埋め）  
（            ）日以上（            ）日未満

### 2. 正しい避難方法を知る

- ① 荒川が氾濫した場合の避難所の場所の位置を地図上に①、②で示してください。  
（①：第一避難所、②第二避難所）



- ② 緊急・災害時の園児数の確認方法はどのように行いますか。(自由記載)

--

- ③ 緊急・災害時の職員はどのように役割を分担していますか。(自由記載)

**施設長：**

**主任：**

**保育士：**

**調理師：**

**看護師：**

- ④ 施設長・主任が不在の場合の指揮はどうなりますか。(自由記載)

--

- ⑤ おまけ(記載)

高野園には消火器が( )個あります。

【場所】

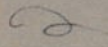
--

添付資料③

伝達ボード

ひよこ(0歳児) 伝達

伝達事項確認票      2020年 3 月 12 日(木)

名前	保護者からの連絡(前日からの連絡)	受入者	保育園からの連絡事項・引継ぎ	記入者	伝達者
<del>小田切 一流</del>	和吹				
佐藤 滋夏	36.5				
清水 理旬	36.3		⑦午睡中咳が止まらな	⑧	
高田 薫	36.0				



## 散歩車（避難車）の正しい使い方

- ① 散歩車は、避難車でもあります。日頃から安全点検を行い、かつ清潔に維持し、いつでも使用できるようにすること。
- ② 散歩車における危険性
  - 1：乗降時や使用中に落下の危険性あり（実際、AIAIで起きました）  
一人でも乗っているときは散歩車から離れず見守ること
  - 2：狭い空間のため場所の取り合いによるトラブルが起きやすい  
噛みつきやひっかきに注意し、常に子どもを見守ること
  - 3：坂道では自然に進んでしまう  
停まるときは必ずブレーキを活用すること（平坦な場所でも）
  - 4：ブレーキに指が挟まる危険性あり  
ブレーキ解除の際は、レバーに子どもの指がかかっているか注意すること
  - 5：夏場は黒い部分が熱くなり火傷の危険性あり  
カバーを活用したり使用前に保育士が確認したりして、必要に応じて冷やすなどの配慮をすること
  - 6：段差で鼻・口（歯）を強打する可能性あり  
子どもの口の高さに淵があり舐めたりしていることが多いので注意すること
  - 7：立ち乗り用に座っていると他児に手の指を踏まれてしまう危険性あり  
立って乗るよう子どもに指導しましょう



マイ・タイムラインの閲覧「台風が近づいているとき！」

警戒レベル	1	2	3	4	5
避難情報		自主避難など 注意の呼びかけ	避難準備・ 高齢者等避難開始	避難勧告 避難指示（緊急）	災害発生 情報
大雨 に関する気象情報	早期注意情報	大雨・洪水注意報	大雨・洪水警報 (大雨や洪水となる3~2時間前 程度)		災害発生
風に関する気象情報		強風注意報		暴風警報 (暴風となる6~3時間前程度)	
高潮に関する情報		高潮注意報		高潮警報 (高潮となる6~3時間前程度)	
河川の氾濫 に関する情報		氾濫注意情報 ※ 氾濫情報が発表されない河川 では、洪水警報・大雨警報の 危険度分布を見ながら危険度 を確認	氾濫警戒情報 ※ 氾濫情報が発表されない河川 では、洪水警報・大雨警報の 危険度分布を見ながら危険度 を確認	氾濫危険情報 (氾濫時間~1時間前程度)	

※ 警戒レベルや防災気象情報は、必ずしもこのとおりの順番で発表されるとは限らず、あくまでも目安です。  
 ※ 警戒レベル5の時は既に災害が発生している状況であり、やむを得ずこの時までに避難が完了していない場合は命を守る最善の行動をとりましょう。

私と家族がとる行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 正確な情報収集</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 正確な人数確認</li> <li>○ 避難方法の確認</li> <li>○ 避難靴の用意</li> <li>○ 避難車の用意</li> <li>○ おんぶひもの用意</li> <li>○ 非常用バックの用意</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 園舎1階に集まり正確な人数確認</li> <li>○ ブログ・CCSNOTE・171番で避難先を保護者へ伝える</li> <li>○ 0, 1歳児全員おんぶ 2歳児は避難車へ乗せる 3歳児以上児は靴を着用</li> <li>○ 電子機器類はできるだけ2階に運ぶ</li> <li>○ 避難開始</li> </ul>
地域でとる行動		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 避難先へ電話連絡</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 近隣住民に応援依頼</li> <li>○ 自治体に電話連絡</li> </ul>



避難する場所

- ①扇小学校3階 ②江北桜中学校3階以上

別紙資料⑤